聚八仙之會雜筆下　我傳

特別
イ 4
3159
A43

昭和十八、七月　以後流

(一)古語源與八丰行比較

(二)勝餘雜錄　二月十九日ノ

(三)筆曙ノ二十日

(四)日本書紀ノ三十日ノ

14
3159
A43

○花木を瓶に生る法　「理氣指南」

一　山茶花は葉の中に塩を入れば花落ちず

二　萍蓬は根を四つに割りて山椒一粒を插めば二三日保つ

三　牡丹と芍藥は根を熟灰にて焼く

四　竹は中心を通して筒中に水を充ればいつまでも

五　に堪ゆ。中心に水氣の到りかぬる若い紙撚を中に通して能く水を引上るとよし

○文晁ゑこが藤姿を画めせらる白柏子の事ハ
別冊随筆をあつ

○二十四史

史記一三〇卷
漢書一二〇卷
後漢書一二〇卷
三國志六五卷
晉書一三〇卷
宋書一〇〇卷
南齊書五九卷
梁書五六卷
陳書三六卷
魏書一一四卷
北齊書五〇卷
周書五〇卷
隋書八五卷
南史八〇卷
北史一〇〇卷
舊唐書二〇〇卷
新唐書二二五卷

池之端中島屋製

舊五代史一五〇卷
新五代史記七四卷
宋史四九六卷
遼史一一六卷
金史一三五卷
元史二一〇卷
明史三三六卷
勝引春章甲州ゟ隱遁せゝる事ハ退閒雜
記ゟ出ず
佛語集　資治通鑑卷二百二卷ゟ永隆元年八月

池之端中島屋製

の條ゟ、太子洗馬劉訥言、嘗撰佛語集以獻賢
賢敗、搜得之、上怒曰、以六經教人、猶恐不化、
乃進佛語辭說、豈輔導之義邪ゟ

寶丹

辰砂　阿仙　龍腦　各五匁　人參三匁　薄荷
二匁　沈香　麝香　各一匁　以上審まて湯氣の
あるゝやうに煉ふ〻し

丁子二分　龍腦一匁　黑蛤の實黑燒二匁
山椒二分　右丸藥

○シヤンヒ斯

青化加里　硫酸銅

○非齒頂談（天明四年）に杜口（神澤貞幹）

ハ十四歳の時金始めて知る人となりとあり

○相法

物を貴ことりわを惡くいみきらふ相

金錢の事を口に出さぬ者を却つて甚事と如

才なきわ

自利自慢するは金もうけの無き相

常に小なる事にて時々ひよつと大なる聲

すゝりつゝ心を踏み止まり出でき相

奴の子を呼ぶやうにおを呼ぶ者を下賤く

服する相

酒を嗜む者を心に苦ある相

白ひ人相を好む者を不意の果福を得んと

を望む者

人の噂咄人の惡をらつ者を人を憂慮をつ

かすわ、一旦取りこむる早けれども油斷あり

難し信を變して仇をなすわ

面をつゝみて額する人をにくむある者をすわ

池之端中島屋製

それなり

面とうつむけて人の話を聞く者を奸佞の理屈をいふなり

悪事を仕うと思ふ者を実に甚る世に己れ恐ろしき人なるかと人を知らせ度おもひ強きふりをするなり

旅りを好む者は田舎を見あるく事を好む

はせの学みを望みるゝ上金かゝめ相たくゝ甚きうらしの人をも目ろ憂るとあり

か、兎角世を離れ心あるなり

池之端中島屋製

冷食して發汗する人は大破財あり、又横死の相なり

家野の歩むゆく行く者は貧賤の相

人来りて家に入る時さ一足して物を伺ふ如くする者は常に心配労倦あり不祥野賤のおたり

常に眉目を撫づる人は萬事心に任せず

人に應對する時肘を拄て或は慢りに目を動かし居丈高きは野賤の相にして發達する事難し

人常に動いて虎の如く歩して或は居直り又膝を
動かすは位不安なるべし相の生涯
癖直る事なし
眼青く光芒あるは肝癇多し
默して涙を流す者は腎氣弱く病高ぶる
人に對してうつむき下を見るは思多く愁
の相なり
準頭豊肉なるは心毒なく人の尊み敬ひ
を受く幸福多く英豪のお
人中〳〵如此を中くまるもつて運命発

池之端中島屋製

達す猶晩年まで壮健のごとくなるべし
承漿及び下髭美しく生ずるは吉相とす
五岳全ては五福五寿俱に備る是ぞ芳
名を後世に輝す
耳を前に山なりて後大なるは前に困
して後に富む
耳硬きは身正しく心清し望み滞
るなく福寿共に全し
耳ほくろあるは和を論ぜず諸聰明
にして諸藝を施すべきの人なるべし

頭髮のびてもむさくるしからざるは隱者の表なり

○日本書紀神武天皇紀ノ自天祖降臨以逮于今一百七十九萬二千四百七十餘歲トアリ

○粘葉次第紙　比古婆衣巻之一七丁オニ出ツ

○識損益

○後漢向長字子平潛隱於家讀易至損益卦喟然嘆曰吾知富不如貧貴不如賤未知死何如生耳

子を產むを生しとゝ

比古婆衣三ノ巻二十六オニ比古布都押之信命を生ーのひこと云トアリ

○河原者　奇異雜談集ニ犬追物の由河原者　猪の肉より犬を放てば云ゝ

○月刈藻集ニ人語云、西行俊成ノモトヘ行ケルトキ、頃シモ秋ノスヘナリケルニ、庭前ノクチナシノ木ニ、黃紅葉スキテアルヲ西行トリテ

口ナシニキバノアルコソフシギナレ

ト申タリケルニ、俊成ナヽトナラン庭ヲ三ヲ、前栽ノ殘菊ノ枝ヲヲリテ西行カヒザニ置テ、

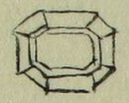
池之端中島屋製

キノノ花トテミ、モアラバヤ
西行シラケテニゲ出タリシトナン。
カヽルコトモ其道ニ熟シタル郎時歟ニ
トアリ、西行ヤ後成ホドノ人達モカヽル愚
ニモワカヌコトヲ面白カルモノニヤ疑ハシ、コノナ
コトハ徳川時代ノ狂歌師ニモ若シルワザ
トオモハル、蓋シ後人ノ作リモノトナンヤシ

○ 擲骰子呪 伊諦彌諦彌諦彌揭羅諦 念滿萬遍
宋隨呼而成 酉陽雜俎五、九オ宋居士說

○ 主夜神呪 婆珊婆演底 〃 〃 雍益堅說

池之端中島屋製



○ 金剛石。明徹色無シ、蓋シ黄色青色綠色
等ヲ帶ブルアリ、結晶ハ八面形、晝間太陽ノ
光線ヲ含マシムレバ暗夜光輝ヲ放ツ。印度及
ビ巴西(ブラジル)等ノ熱帶地方ノ砂礫中ヨリ獲
鋼玉石。洋名「コルンド」硬キコト金剛石ニ次ダ、
青色赤色ノ者ヲ上品トス、透明不透明ノ
二種アリ、甚透明ノ者ハ殆ド金剛石ト甚
價ヲ同ジクス、結晶ハ六面形、通常獲ル者ハ
細粒ノミ

結晶ハ斜方柱状

黄玉石。洋名「トパーズ」トヨフ、色ハ淡黄ノ者多シ、近来近江栗太郡ヨリ発見セリ、無色淡緑菜褐ノ三種ヲ出ス、六七分ノ小顆ノミ

電氣石。洋名「トルマリン」ト云フ柱ノ結晶ニシテ黒色ヲ通常トス、甲斐ノ巨摩郡ヨリ出ヅ

石榴珠。洋名「グラナート」、十二面形二十四面形ノ結晶ナリ、赤色透明ノモノハ世ニ石榴石トイフ、其細末ナルモノハ玉工ノ用ヒル金剛砂是ナリ、河内石川郡ヨリ出ヅ

珪石。洋名「クワルツ」トヨフ、其結晶スル者ヲ

池之端中島屋製

水晶

瑪瑙トシ、結晶セザル者ヲ

角石　珪板石　燧石トス

水晶ハ其未ダ孫庚ヲ經ザル者ヲ

石英トヨフ、晶形六角形ナリ、甲斐金峰山ヨリ出スモノ最良ニシテ徑六寸以上ニ及ブ、

又紫水晶（紫石英）黒水晶（黒石英）

紅水晶（紅石英）等各色ノ異アリ、其ノ

碧玉ト稱スルモノハ越後實川山ヨリ産ス

瑪瑙ハ縞瑪瑙、苔瑪瑙、白瑪瑙（珊石）血晶

石等アリ

角石。武蔵秩父山ハ金山ノ石ヨリ

硅板石。紀伊日高郡ヨリ出ヅル金付石是

シナリ、

蛋白石

螺化石 筑後生葉郡ヨリ出ツ

松花石 下野芳賀郡ヨリ出ツ 化石ナリ

輝石 洋名「アウギート」斜方柱ノ結晶ニ

シテ黒色ノモノタヾミ、箱根山上ノ湖畔ヨリ

砂状ノ細粒ノ数見ル、其中ニ緑色ニシテ

池之端中島屋製

稍透明ナルモノアリ

角閃石。洋名「オンヒブレンデ」

緑織石。石英中ノ草入水晶ハ此緑織石ノ混合

セルモノナリ、淡路ノ沼島ヨリ出ヅ

蛇紋石。豊後肥后ノ竹葉石、駿河ノ葡萄石

皆同種ナリ

凍石。石華ナリ

石絨。石綿即チ火浣布ヲ作ル、秩父、上州

甘楽郡信州佐久郡ヨリ出ヅ

長石。一名菩薩石、六方柱ノ晶形ニシテ馬歯

ノ如ク、赤キ肉色ニシテ光輝アリ

雲母。洋名「ムスコビート」キラ、ナリ、金華山ハ古來金砂ナリト稱セシガ實ハ雲母ナリ、

大浣布ノ代用トナル

石緑。洋名「マラヒート」即チ孔雀石ナリ

其崩壞セルモノヲ山綠青トイフ、

羽後越後豐後等ヨリ葡萄狀纖維狀ナル

純綠品ヲ出セリ

重晶石。洋名「バリット」硫酸重土ニシテ有毒ナリ斜方柱狀ノ結晶品ニシテ石類中最モ重シ

池之端中島屋製

羽前置賜ヨリ多量ニ產スルモ不透明ニシテ

晶形ヲ成サズ

灰石。洋石「カルチート」燒キテ石灰トナスベシ

方解石。「イヽギリ」ト呼ブ、又寒水石ト唱ヘ細

末ニシテ歯磨粉ノ料トス

大理石。二種アリ、一ハ常陸ノ寒水石、一ハ常

陸ニテ「マダラ石」ト呼ブモノナリ

マダラ石ハ其斑後ニヨリテ笹斑、紅糸斑、霜

降斑、鼈甲斑等ノ名アリ、又美濃ニテハ赤

阪蠟石ト稱シ、其紋樣ニヨリテ更紗蠟石、

縞蝙石、鮫蝙石、鼠蝙石等ノ名アリ

鍾乳石。「イシノチヽ」「ツラヽイシ」等ノ名アリ、又同種ニシテ下ヨリ簇生シ甚ダ竹筍ノ如キモノヲ殷蓼ト云ヒ又石筍トモフ

霰石。洋名「アラゴニート」漢名鴛鴦石

燐灰石。燐酸石灰石ノ異種。洋名「アパチート」トモフ、植物ノ培養ニ有益ナリ。近江栗太郡ヨリ出ヅ

螢石。菓鋪ニテ紫石英トヨブ、玻璃ニ彫刻スルニ用フ

池之端中島屋製

石膏。洋名ギープス

鹵石。金石ノ第二種ナリ、字書ニ天生ラ鹵トヨヒ、人造ラ鹽トヨフトアリ。悉ク水ニ溶解ス

岩鹽。岩山海ノ三種アリ、

硇砂

硼砂

硝石

曹達

芒硝

礬石

明礬
緜礬
膽礬
皓礬。硫酸亜鉛
燃礦
石墨
石炭
石油
琥珀
硫黄

土瀝青

池之端中島屋製

雄黄。洋名リアルガル」鶏冠石
雌黄。洋名アウリピグメント」
雄ハ伊勢飯高郡陸前栗原郡ヨリ産ス
雌ハ画家ノ彩色料ニ稱スルモノハ籐黄ニテ

硫化砒素

植物ナリ

金鑛
銅
黄金
白金
銀

白鑞

天降鐵
磁鐵
赤鐵
褐鐵
錫鐵石
錫。自然生ノ者ナシ錫石ヨリ得
朱砂
昆銀
閃亜鉛
錫怯脂
燧水鉛

輝銀
方鉛
黄鐵
黄銅
斑銅
輝銅
麦砂
礬石

池之端中島屋製

法律密なるに随ひて犯人多し
度外の親切は怨をひく
倉悪の君主は法律を作る賢し
人法律に詳かなれば紳士堂々一厭はる
閑暇は怒用より猶苦し
貝原益軒秘事記養生訓に曰く、
人として學ばざるは天理なるべけり
身を艱難成就する中に幸福の業

池之端中島屋製

恒河駛流水　可生白蓮華　黃鳥作白
形　黑烏變為赤　假使瞻部樹　可
生多羅果　褐樹羅中枝　能出庵羅葉
斯等希有物　或容可轉變　世尊之舍利
畢竟不可得　假使用龜毛　織成上妙
服　寒時可被著　方求佛舍利　假使
蚊蚋足　可使成樓觀　堅固不搖動
方求佛舍利　假使水輕典　口中生白齒
長大利如鋒　方求佛舍利　假使持兎

池之端中島屋製

角　用成於樑磴　可升上天宮　方求佛
舍利　鼠緣此樑上　除生阿蘇羅　能
障空中月　方求佛舍利　若蠅飲酒醉
周行村神邑　廣造於舍宅　方求佛
舍利　若使驢脣邑　赤如頻婆果
善作於歌舞　方求佛舍利　烏與鵂
鶹鳥　同共一處遊　彼此相順從　方
求佛舍利　假使波羅葉　可成於衆蓋
能遮於大雨　方求佛舍利　假使大船船
盛滿諸財寶　能令陸地行　方求佛舍

利　假使鷦鷯鳥　以嗜衛香山　隨處
任遊行　方求佛舍利　（如來壽量品一節）

一切煩惱以樂欲為本（從樂欲生）諸佛世尊
斷樂欲故名為涅槃（二）以諸如來斷
諸樂欲不取一法以不取故無去無來
無所取故名為涅槃（三）以世尊事及
世不取是則法身不生不滅世生滅
故名為涅槃（四）此世生滅非法不宣
言說斷故名為涅槃（五）我人（有者）

鉄箒

姓名の明記なきものは採らず紙上の匿名は隨意

恥の上塗

◇法主に辭職を强要したのが不都合だこあつて、本願寺の坊さん連が、ねぢ鉢巻の大憤慨。全國十萬の各宗僧侶、よに檄を飛ばして、文相彈劾の大運動を起すこある。みつこも無いからおよしなさい。

◇それ程お寺の面目が大事なら何故もつこ平素に道ををさめることにつこめて、あんな醜態を管長みづからが演じるやうな不德を致さぬやうに心がけなかつたか。散世間の物笑ひになつておいて、やれ辭職の强要は怪しからぬなこ、實質の無い面目を、今更大事さうに騒ぐ所に、諸君の良心のもうらうさが見すかされる。

◇そればかりでない。若し文相の處置が不都合なら、何も全國に檄を飛ばして、頭かずでもつて當る必要はない。正義は頭かずで增減しない。堂々こ文相こ一騎打をするが宜しい。兎角頭かずで脅かさうこするのが近來の社會の一大惡傾向である。身いやしくも世道人心の教導の任に當る程の者は數によつて事をしようこいふやうな、卑劣な根性から先づ解脫すべきである。

◇放蕩息子が勘當された時に、その勘當の仕方が面白くなかつたこいふので、息子の惡い友達連が團結して、親父をなぐるこ脅かしたからこて、たれもそれを譽めやしない。もちろんそれで、その連中の面目が立つこはなほさら思やしない。世間では諸君の文相彈劾運動を、丁度それ位に考へてゐる。

◇果して文相の處置が不都合なら、そんな不都合をされる程に輕く見られるやうになつた自己宗門の不德を先づ反省すべきである。そして、運動や脅迫で面目を立てやうこいふやうな、淺ましい心がけを一掃して、道の德を積むここによつて宗門の面目を立てるやうに心がけるべきである。それだけの分別が無いやうなら、諸君は最早人を教へる資格の無い者である日本國は諸君の存在を必要こしない（石狩豐平寄）

大正十年九月廿九日　あるこかく勿佛陀の五十年　天童

法生威儀依故名為涅槃

普天之下莫非王土率土之濱莫非王臣

（列仙傳老子傳中漢文帝之語）

○道高きこと一丈魔の高さ九尺

○風ふきすぎてのちの大穴哉

たくさんなる世のうつり　寂蓮

○好雨知時節當春乃發生隨風潛入夜

潤物細無聲野徑雲俱黑江船火獨明

曉看紅濕處花重錦官城

右花社春夜七日西行

池之端中島屋製

一二 ○盤古氏

天地初開形如卵白包黃

茹毛飲血

穴居野處

一三 ○天皇氏

干支

一三 ○地皇氏

三辰日月星　晝夜四時　弦望　晦朔

○人皇氏
九州 冀、兖、青、徐、揚、荆、豫、梁、雍
君臣、政教、飲食、男女、
○有巢氏
巢居
○燧人氏
火食、鑽火 烹飪 民人得遂其生
祝誦氏
史皇氏 初文字
太昊伏羲氏

池之端中島屋製

書契 六書 河圖 嫁娶 琴瑟
網罟
女媧氏
共工氏
葛天氏
無懷氏
炎帝神農氏
耕稼 耒耜 鎛鎒 醫藥 市 煑塩
帝臨魁

帝嚳高辛氏
帝摯
帝堯陶唐氏
帝舜有虞氏
夏
大禹

帝承
帝明
帝宜
帝來
帝裏
帝榆罔
黃帝軒轅氏
少昊金天氏
顓頊高陽氏

池之端中島屋製

○四季時候の事

一春二月の節陽気を引き出さるゝ。いまだ西北の風盛んにして二月の末より風せちにして雨降りよ長雨なり陽気漸々廻り雨降り続き草木芽を生じ土用に入る。暖気漸々に生じ草を出さるゝ。三月に入り東南の風を受け東南の風廻り草木芽を出し草を繁雨の節となる。五月春風の時分

一夏三月より風順にして稼業よし

風の跡雨降りて陽の方より風吹
出一四月の末つかた入梅に成ぬ
二十五日雨降る明る廿六日入梅
同じく吹雨時の風北より吹出
昼より入る八日迄雨降て晴
は風吹ども雨降ず五月五日入る六十八日の
うち陰陽の移りて雨降ず
土用明て大風吹出
風とともに東西の方より吹風を入梅の
中共風吹なり五月中の風久しく

池之端中島屋製

吹ハ風一のうちまた入し土用明て宣
和の風吹ども吹て夜已へ吹すり梅雨
あれば大風の起ることを知べし
一秋七月ハ陰気の月なれども
陽気つよく日照ありて
雨ハ降すして風吹出
二百十日二十日の風ハ陰陽の風せめぎあり
ひ空の風あれば雲山を纏
月の中ごろ風雨七月末八
吹風強一天気不同にして風雨あり九

月の節より八風吹やうり靜にして
雨を来すやうなれども兎角陰りて雨の
後より風を生ずる是を濱西風といふ
一説十月小雪風を候て南より風吹
きて長閑なることあり其後西北の風
吹強風荒く是を雪風起るといふ
十月の節より八風吹雪あり十二
月の節より陰のうちより風雨あるべし
北西南の八方氣甚しく西北の風
急にして雪降て氷石のごとく氣

最も強し四季の時候天氣の考へ多
年世俗煙を以て見習ふべし

○天氣日和考への事

一元日明方の見様は先日輪の光を
寅卯刻に移りあるとき地に移りたる
ならば天地和合の順氣を知るべし
一晦日の日和は入日に亦雨災ひ月の出入に
あるより毎月朝日より十五日の間は若月
にて入るなれども十六日より晩日
おそく出る故月出るとあるを知る

雷雷雨雹雷雨雹を以て見分ること

一陽分　寅卯辰巳午未　一月は七月より夏八月まで
　　正二三四五六　一月は正月の節より青龍と
一陰分　申酉戌亥子丑　夏七月より後の八月と
　　七八九十土土　七月の節より十二月迄と

是年月日時を陰陽和り雷雨大雨雹
合せ天象を考ずして夫陽風は東方より
吹き萬物を育ひ雨風を起し雨滋
潤し萬物を育ひ秋に風霧を
入れ物を育ひ秋に風霧を
掃ひ萬物を育ひ冬は西北より風吹
いて萬物傷敗す雷雷雨雹して草枯ス

池之端中島屋製

草枯ス

一陽分は風雲を吹ゆるく空の雲行早
く雲して地上風節の為に故に土中潤ひあり
て萬物を育ス

一陰分は風下を吹ゆるく空の雲の移り
して地上の風を吹て はげしく ゆるく 土中
乾き萬物を枯す

一陽の月辰巳の方より雲立時は風を生ず
一陰の月子丑の方より雲立時は風を生ず
一陽の月紫の雲たなびは火と知るべし

一陰の月未申酉戌亥子丑寅卯辰巳午の時いとまちひと知るべし

一毎月の二三日の前後を人合せ考へべし

但日記の天気の善悪を附置き跡の

月大風雷有るより知るべし合すべし

一雷地震い気候の変ひ風のせらるべし

一入日の見様い申の刻より考へべし全の

七ツ時なり

一日の出の見様い寅の刻より考へべし

明ケ七ツ時なり

一風を知るい先空を暗の気を作風陽の

を考へ甚上にて空の様子を見れ

ば知るべきなり

一四季の土用を暖すると夏を暑く秋い

冷しく冬い寒し 但雨降 大日つなり

式気遠ふ時いふ順と知るべし

一風順く運る時いあるやうにて逆に運る

時いなやまちあり大風俄に吹止時も

あり 逆風を生ずるべし

一夏東風吹時を夜時を引るなり

一夏西風吹時を昼ずあるべきなり

一秋の風吹時いかなる雨のきさしなり
一冬小風吹時いかなる前日雪を降らすなり
一秋冬南風吹つゝく時は風雨のきさしなり
一草の葉しをるゝ時は陰風を生ず
一草の葉乾く時は陽風を生ず
一山鮮明なる見る時は陽氣を近し
一山見へざる時は陰氣を近し
一日暈月暈は雨を司る必時は風を生ず
一雨の脚こまやかなれば陰風を生ず
一雨の脚大きなる時は陽風を生ず

一雲即時に雨時は陽風を生ず
一雲まだらなる時は雨を生ず
一海の潮めつゝくるゝ時は必ず大風を生ず
一虹たちて村雨あれば大風を生ず
一赤色の明なる星りあれば雨なり近し
一月の色あれば毎夜雨の氣なり
一空うすき雲ありれば雨なきなり
一雨氣なる時は雨なり近し
一日照頭頂へ雨なる心惡きときは雨なり近し
一引雲は雨を生ず

一雨の降出すより天氣を考へる事左之通
子辰申の時降出ない　霧雨なり
丑巳酉の時降出すい　晴て日照
寅午戌の時降出ない　晴て半時過る
卯未亥の時降出ない　雨ふらず
一うす黒い風を生ず
一赤い月暈ある災ひあり
一黄なる雲たつて災ひなし
一炎天ゆへ赤い災ひなし
一三方より雲立て動ぐ内の方の黒雲

池之端中島屋製

こゝは必ず大風を生ず
一壬癸の日降出す雨いなり　丙丁の日
ふり出す雨い新しく晴る事あり
一北の方より雲七ツ重なる赤雲立ゆかるゝ
大風を生ず
一冬の風土煙りと空へ吸上ゲ雲となり
甚色黄なれば去るなれば黒赤い火
災の兆也紫い去なりとしるべし
一東の方より雲動電りい風雨のきざし
一西の方より雲動電りい日照なり

一南の方震動雷りして風雨のきわまりなり
一北の方震動雷りして大風のきわまりなり
但し震動稍遠きりして雷いわさはひろく
夏の雨なり秋の風雨なり冬の風雪
なりなり
○大潮小潮等りの事
一五日より小潮にとなる十日を長潮となる
十二日を小潮なり
一十三日より大潮にとなる十九日なり
一廿日より小潮にとなる廿五日を長潮とな

廿七日をもてなり
一廿八日より大潮にとなる四日を
潮等りとなる小和も此時に変ずなり
嬉しくしるべし
○潮候考の事
一南の方より夜潮を下り潮と
なる海深くして逆潮有りと
いふ其色青く海と異り海とな
一北より出る潮を近潮と
濁り黒赤交りて逆潮なり
一東より西へ入潮其色まくらし

さゝし漁船の
一面より三〜東へ五湖甚色空色さゝ
海清く漁船あり
右の外種々の御の名あり國所よりの
かゝの遠ひあり潮行ゆゝ逆らふ
時を後高しし船を繋して紀ぶし
（大廻船安乗録）

池之端中島屋製

時。

○茗壺源流

陶し由来遥矣、見于周礼考工記、神祇、春秋、
史記、鐸氏子於書、而書屋小事有陶窯之
設、至明清尤盛矣、然元明初、未見所謂
茗壺者、及嘗用者、趙陽羨茗壺矣、始知
其製澄觴于明金沙寺僧傳之供春供
春之後有董翰、趙梁、元錫、明明李茂
林數子、皆為名工、而時大彬者傑出、能仿
供春、得于心應于手、文房肆攷曰有時大賓、
以紫泥焼茶壺大彬壺是也、大彬傳之李

仲芳、徐友泉、邵玉春、邵文金、邵文銀、蔣伯
荃、陳俊卿、而李徐尤獲其髓、名不虛
于太彬、豈出藝之才也、陶肆謠云、壺家
妙手稱三大、是也、又有陳用卿者、負力尚
氣、自成一家、蔣志雯亦有名、陳信卿專
學時壽、浚普生、博信於家、共以其妙、
陳光甫、仿供時而為入室、陳仲美、沈
君用、各造如象於玩、邵蕃、周後谿、邵
玉孫、並萬曆間人、周季山、陳和之、陳挺
生、承雲從、沈君盛、並天啓崇禎間人、以

池之端中島屋製

上八人皆一時之名手、陳辰、巧鐫款識、
徐令音、頂不孫、沈子澂、亦明季人、陳子
畦、陳鳴遠、徐次京、惠孟臣、葛軒、鄭寧
侯、年代並不可考、而鳴遠孟臣名尤顯
至清則、許龍文、工于花卉象生、又有以
姑蘇為飾四字為款識者、未詳為誰、陳
曼生、曜于治、共同流好奇人、而製作甚
雅、又有鄧年、逸出、箋生、樹生於子、未
詳、孰先孰後、其他有專門戲工、不暇
枚舉、今所錄、從明至清風之百年間、

而四十許人皆此技之高手、可謂奪造化之工矣、周郎曰、壺子業具、用處一耳、而瑞草名泉、惟俊寄、實仙子之洞天福地、梵王之香海蓮邦、妙法寶非誣也、

若壺園錄

禮書
樂書
律書
歷書
史記八書
天官書
封禪書
河渠書
平準書
(三)刑法志
○(二)禮樂志
○(一)律歷志
(七)五行志
漢書十志
(六)天文志
(五)郊祀志
○(九)溝洫志
○(四)食貨志
(十)藝文志
(八)地理志

也之藏中島屋製

萬葉集抄

おきゝの好しと善く見て好しと言ひし

吉野善く見よよき人よ君　一

春すきて夏来るらし白妙の

衣乾したり天の香具山　一

巨勢山のつらつらつばきつらつらに

見つゝ思ふな巨勢の春野を　一

丈夫の鞆の音すなり武士の

大臣　楯立つらしも　一

他之綜中島蔵書

家よりあがり竹に登る飯を草枕
旅ゆくあるじは雄の笠ふりの登る　一
志賀の海人は海布かりの塩焼き暇なく
櫛笥の小櫛取りも見あくに　三
おつち山夕越えてきて庵前の
すみくら川原に一人かなしむ　三
賢しと知りぬるは酒飲みて
酔泣するは傷りくるるむ　三
言はむ術せむ術知らに極まりて
責きのい酒よしあるもの　三

十三
二つなき忍をしすれば常の帯を三重結ぶべく我が
ゐはりめ

あなみるく賢をすと酒飲まぬ
人をよく見てなほ猶ほかも似る　三
吉野なるなつみの川の川淀よ
時ぐ鳴くるる山陰よりして　三
日すは見て手には取るべき月の西の
桂の如き妹をいつにきむ　四
夢の逢ひ苦しかりけり驚きて
掻探れども手まもの御れば　四
一寸のみ妹が結ばむ帯をすら
三重結ぶべく我ぐ身はなりぬ　四

銀も黄金も玉も何せむに
優れる宝 なにしあへむや 五
和歌の浦に潮満ちくれば潟を無み
葦辺をさして鶴鳴き渡る 六
橘は実もさへ花も咲きけり
枝に霜降れど常葉の樹 六
さとつひに雪降りぬれども今日見つるかも
明日さへ見まく欲しき君かもと 七
白玉は人に知られずとも知るべきらばこそ
我し知らばかもとも 七

（さーらばつみてゆめん住の江の岸のまつかぜ忘れ草）

天の海に雲の波立ち月の船
星の林に漕ぎ隠るらむ見ゆ 七
暇あらば拾ひに行かむ沖つ白波
立ち寄るべくあらぬ海辺を 七
風早の三穂の浦曲を漕ぐ舟の
舟人騒ぐ波立つらしも 七
大伴の御津の浜松待ちかねて
妹が待つらむ夜は更けぬらし
春の野に菫摘みにと来しわれぞ
野をなつかしみ一夜寝にける 八

時鳴く沖辺川を新見えて
今わ咲くらむ山吹の花　八
秋の野に咲きたる花を折り
かざしぬ人の数にはいれり　七
萩ごと花尾花葛花撫子の花
女郎花また藤袴朝顔の花　八
葛錦の吉野の井見てだにたちなら
水汲みしゆむ手見名し思ひゆ　九
方角の大なる人は為れわ
物をかぎりてここに集へる　十

地之宿中島題設

地蔵は新しきの一時人は
舞りくるのみ一宵かるべし　十
山科の本幡の山を馬ならべ
かちより我が来汝を思ひ兼ねて　十
かにかくにものは思はず駿馬人の
打つ墨縄のたゞ一道に　十一
かたこのくに物い思はず初霜の
我身一つは君がまに　十一
な行きそとかりも来やと顧みに
行けどかくらず道の長手を　十二

長歌中に花ゐつり
ほりこなは水清く
屋山りこなは草丸
す豪大君の遊に
こそ歌ひめ

草枕旅りく君を人目多み
袖振らずして有りし時ゆゑ　十二
多摩川に晒す手作さらさらに
何ぞ此の児の愛しきやまし　十三
安積山影さへ見ゆる山の井の
浅き心を我が思はなくに　十四
彌高の己神さびて青くもの
柳引く日すらを小雨そぼふる　十五
天皇の御代栄えむと東国の
陸奥山ゆ黄金花咲　十六

たらの浦の底さへ匂ふ袖を
かぎりてりもみ見め人のため　十七
斯くばかりゆゑしくもあらばまそ鏡
見ぬ日時なくあらまほしきを　十八
新しき年の始に思ふどち
い斎れて居れば嬉しくもあるか　十九
我が宿のいさらの花の
音の迷けさ此の夕べかな　十九

古今集抄

今年の春はいきたりと一すぢをたのみてやはらんかりそめとやはら
袖ひぢて結びし水の氷れるを春立つけふの風やとくらん　紀貫之
たれあさぼらけ有明の月とみるまで吉野の山の桜花
雪の降るを花とみまがふ
をちこちのたづきもしらぬ山中に おぼつかなくも呼ぶこどり
春霞たつを見すてゆく雁は花なき里に住やならへる　伊勢
君をのみ思ひ寝の夢をたびかさね　伊勢
古今集抄

（はいさ四てしらす都の花ぞ昔の春をばひけるを見そ
世をたえて花のすがたはもの思ふ人の心の内にぞ咲ける　業平
見わくさは柳桜をこきまぜて都そ春の錦なりける
物思へはさわの蛍も我が身をうちに寄る人い魂かとそみる　駿河
我が恋の思ひそそ上に寄る人い魂かとそみる　駿河
たかうあてもなゆゆしと知りながら結ぶ手の結ぶ程にぞ
人かしのひとりのみとけさまぬるは　結ぶ手の結ぶ程にぞ
―つ心なく花のちるらん　友則
いざけふはいとの心をはるばるとなけの都のかげかは　業平
都の色を移りにけりなうらに我が身ふるなでおさしすに　かの

池之端中島屋製

秋来ぬと目にはさやかに見えねとも風の音にぞ驚かれぬる　敏行
月見れはちこちにかはれる事なれとあきはかなしき
秋風に初尾ふるとき一つの秋をたにかはる
ものとかはるとかはるとかはるとかはるとかはる
あるあるとて折れるまでも女郎花おちるとて人の
吹くとて秋の草の花あるとて
白露の時もしをれぬ女郎花
心をこそ折らるべかりけれ
立田川紅葉ながれてとまるとかはるとかはる
秋風にあへぬ紅葉の流れてとまるとかはるとかはる
秋風にあへぬ紅葉の流れてとまるとかはるとかはる

唐衣きつゝなれにし妻しあれははる／＼きぬる旅をしぞ思ふ
名にしおはゞいざこととはん都鳥我が思ふ人はありやなしやと
狩り暮らしたなばたつめに宿からん天の河原に我は来にけり
うちわいかさしとも出見の路のすたれのかたに　業平朝臣
見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなくけふやながめくらさん
おほぬさと名にこそたてれ流れてもつひによるせはありてふものを　返し
ゆく水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり
思ひつゝぬればや人の見えつらん夢としりせばさめざらましを　小町
うたゝねに恋しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき
いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣をかへしてぞきる
住の江の岸による浪よるさへや夢の通ひ路人目よくらん
夕ぐれは雲のはたてにものぞ思ふあまつ空なる人をこふとて
みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れんと思ふ我ならなくに
逢ふことのなぎさにしよる浪なればうらみてのみぞ立ちかへりける
しのゝめのほがら／\と明けゆけばおのがきぬ／\なるぞかなしき
世の中は夢かうつゝかうつゝとも夢とも知らずありてなければ
君やこし我やゆきけんおもほえず夢かうつゝか寝てかさめてか
偽りのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし
今こんといひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな
宮城野のもとあらの小萩露をおもみ風を待つごと君をこそまて

池之端中島屋製

何よりなきせるかなはなのらくの草あらはしかしやまし
そこひなき淵やはさはぐ山川の浅き瀬にこそあだ波はたて
隔つるものなき身の揺遊に離れむと思ふあれなきなに 深草左大臣
我こそ今はあさましときこえし時ありしかのこと
月やちりぬるや春の花なれ我がみひとつはもとの身にして なりひら
わが袖にまだき時雨のふりぬるは君が心に秋やきぬらん
遠きも近くしてば近きき思はぬ中ぞ遠ざかりける 藤原
ひとりのみながむるやどのつまなれば人を忍ぶの草ぞ生ひける 貞登
世の中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞありける
色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける 小町

逢ふのかる藤衣我のらきにこそなみ世をば忘れみじ
浮く涙雨と降らなん渡り川水まさりなばかへりくるがに 篁
皆人は花の衣になりぬなり苔の袂よかわきだにせよ 遍昭
遂にゆく道とはかねてききしかど昨日けふとは思はざりしを 業平
思ふどちまとゐせる夜は唐錦たたまく惜しきものにぞありける
式のひとつゆるさぬ我が身の宿はいみじくぞありけれどこころ
あかつきの鴫の羽がきちよをもあかぬあしばしとどめん よみ人しらず
我が心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月を見て よみ人しらず
古の野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞくむ
今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを

池之端中島屋製

鏡山いざたちよりて見てゆかん年へぬる身は老いやしぬると

我見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いくよ経ぬらん

誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに

世の中はなにかつねなる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる

侘びぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ 小町

山里はものゝ寂しきことこそあれ世のうきよりは住みよかりけり 惟喬みこ

みよしのゝ山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせん

世をすてゝ山に入る人山にても猶うき時はいづちゆくらん みつね

いかならん巌の中に住まばかは世のうき事のきこえこざらん ずや

野とならば鶉となりて鳴きをらんかりにだにやは君は来ざらん

池之端中島屋製

我が庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり 喜撰

風ふけばおきつ白浪たつた山よはにや君がひとりこゆらん

山吹の花色衣ぬしや誰問へど答へずくちなしにして 素性

我を思ふ人を思はぬむくいにや我が思ふ人の我を思はぬ

世の中をいとひたくもと思ふらん心の人に恨みらるれば 元方

身は捨てつ心をだにもはふらさじ終にはいかゞなると知るべく 興風

[illegible]根のみすみやすきものとのみ人のいふらん

[illegible]やまは霧あまし山なるおさきのかつらきつゝさんけり

侘ぶる身はいつかあれとも[illegible]舟の[illegible]

みさぶらひみかさと申せ宮城野の木の下露は雨にまされり

池之端中島屋製

○天候

舟人の最慎む所は天候なり　能く暴風を前知す
るなり　而して速く帆を下げ苫を覆ひ錨を卸す或い
ヂノモノ（沈水の方言なり）の影響湖の神と云ふ　寒い沈水なりきよ乘
りの外ヒンネン（川名の意なり）眞根の義なり　よ捨りて舟を損じ
柁を折る若い人命を殺ふよ　書き忘て
船なる練熟の舟人　知さて風を知る
黑雲を見ると直ちに苫を覆ふて
曉は黑雲を奇異とす　はその方より暴風来る徴なり
東南風は晴なり　西北風は雨なり　然れども時節

ま南なりて雲あり

甲州山よりくもりなるは北西風なり　北西風又ヤマデ

とゝふ日光山より雲なりしるは雨微なり　筑波

出づるの義なり

山よりくもりなるは北東風なり　筑波オロンといふ

雨日は清微なり富士山は黒雲なれば西風

なりなれども西風はフジカタとなり

時なれども雲天なり富士山のこと

時なれども西南風なり

鳥飛下るは風に向ふ是を以て風の方向

を知る

魚高く跳るは雨、低きは晴なり

池之端中島屋製

耳痒きは時の微なり　眉目痒ければ好き事をゆく報ずる

演で鰐なれども雲なれども流れなれども

星の光猛ければ大風の徴なり

天狗或問云夜星爍躍、参星動揺、太白晨見、

此皆風徴或雖之雨也

この参星は二十八宿の中にて尤見易き者なれ

ば舟人これを認めて准十とす故に方言多し

物類稱呼参一名参宿からすきやしとゝふ中星の

横に連りしを三の星と江戸にて三光といふ

又三ツ星とゝふ関西にて沢山星とゝふ東國

して三ちやうの星とゆふ今俗のこと所謂若國高
西にてさいしゃうがしとゝいふ上古民藻汐
草に幽美方言を作てラガンチとゝいふ
是なり
参星に續きて準とする者い昴宿なり物
類稱呼に昴すばるとゝふ東國にて九曜
星とゝふ江戸にて六連星とゝふ俗夷
にてハイワンリコプ、とゝふ
太白星ハ宵の明星晩夷にてキレマチスん
グルとゝいふ方長庚にして曉の明星ニシヤツ

池之端中島屋製

シヤラナとゝふ啓明ともゝ共に金星の別
名なり
雨候の事黄道の發ぶ相雨經に常以戊申日
候欲入時日上有冠雲不問大小視
四方星者大雨青者小雨とゝいふ始諸
書載する所甚多し姑一二を左方に挙ぐ
武備志巻一百十八に海逆忽成春雨來主風
雨烏肚雨白肚風海猪乱起主大
風とゝいふこの海逆ハ胡逆の類なり 觀文
會講下上アマドリの條に一種高須侯の花

岡ゝ海中巖壁ゝある所を毎ゝその形状
頭腦翅色ゝて蛇頭ゝ似ゝて背及び翅黑
く翅最長く翅の裏頭色此角短くて尖
微勾レリ口廣クシテ口ノ中紅色脚翅色ナリ
とゝる者ゝ義楚六帖巻十七ゝ攝大
安福云少受必猫如色而鳥西方有此鳥如
此方鳩鴿同ゝとゝ見えたるゝ即ちこの類ゝ
て水色鳥とは異ゝり水色ゝ鳥ゝ京都ゝ
物理小識巻二云、能公曰竈突発煙平遠
望之亭ゝ直上ゝ晴之候也蜿蜒而起如欲

上而不得者雨徴也、蓋雲将而燈爆理可同
可同視、朝日出光黯淡色含白者雨徴也
日出時雲多被漏、日光散射者雨徴也、雲
雲西布牛羊斷如常者不雨、若喫喫如雪
似不速飛而徴也、蝸牛亟匆遽而徴也、蝸牛之焉、倉皇飛舞而徴也、穴處
之類、羣出于外而徴也
天經或問巻二云、如頭痒耳熱面赤髮
潮體燥肢痛鳥雀翻飛噪空田鼠色出
跳躍羣蟻出穴、蛇蟠日、石脈潤

樹汗流琴音不清鼓音不亮、蹬蹬搖
閑鮮蹬有感於西風之先徵也

以上利根川図志所載

池之端中島屋製

○策彦和尚西湖之詩

餘杭門外日將晡多景朦朧一景無
參得兩奇晴好句　暗中摸索識西湖

○眞壁平四郎

一住經山幸風華　物来園福坐道場
法心覺了芸一物　元是去壁平四郎

○惠林寺快川和尚之偈

○文祿之役朝鮮より連れ来りし八歳の
童子詩二首

煙水茫々恨路長　蒼波萬里隔□鄉　故郷
異人欲語々音別　終日世言送夕陽

夢裏分明恨故鄉　双親逢我問扶桑
華鯨樓上一聲響　梅枕猶疑在大唐

○川田久保氏引歌

雞鳴はにはやこの花咲きぬとぞ
我君山の井のあさゐ心をわすれいる
さゝゐひされるかの夜の夢の復りうら

池之端中島屋製

すゑちかの夢の宮と思ひそめ
人の詞の葉やさしたにはりはをみを
のきのぶとしとりいとをもたゝ
大宮をてはの月しかりはるくに
かくちらくらしがてしかの村雨心
多愛つ心をたともあつとつひはめ
ちの水中の波をめるとをしるべ
紅いうつろふものぞつるをしの
笑ふ為が行末しくやはみをとおのが
保地の寒の面を言せあいう紀よ

女郎花つゆとそつゝけるつゝけるに男山の
梅の花しらちるまでもあるかなとうたひけ
るとかの天満宮の歌やうしるし

以上三十六首

池之端中島屋製

○狂犬に咬まれたる時の妙薬

黄蘗、粉 各一匁 薄荷 一匁 はらや(軽粉) 五分

右三味玉子の白みばかりまぜ解き、腫れたる所
に塗る、毒氣あるゆへは速に乾いて厳つる故度
々塗るべし

○蕎椒、西瓜の毒を解す 一説一云 四、三七

○水中毒(あたり)すれば田螺を食ふべし、知らぬ地に
行くときは、乾田螺を持参すべし

○面疔の奇薬

カハニナ（河蛯か）と山百合を搗き碎き合和し、紙に攤じて瘡上に貼ぶれば濃汁出でて瘡ゆ（遂相醫話）

此方に真の疔まは未だ效を見ず、類疔すは效あり

○五羅俎曰、龜脂可以燃鐵。駝糞能殺壁虫。瓜兩帶、菓雙仁者皆能殺人。生人髮拄樹上、烏鳥不敢食其實。栗子於眉上擦三過則燒之不爆。誤呑銅鐵茅蒻解之

池之端中島屋製

、、稻芋鵝涎解之

、、木屑鐵斧磨水解之

、、水蛭田泥解之

中鷄鴨毒、薑汁解之

中諸毒藥、甘草解之

中砒毒、菉豆解之

中鉛錫毒、陣土甘草湯解之

中蛇毒、白芷解之

中麵毒、蘿蔔解之

中痍狗毒、斑猫解之

中菌蕈毒 地漿解之
烟薰死者 蘿蔔汁解之
諸虫入耳 生油灌之
又曰、兎絲杜仲一切壯陽之劑 久服皆能
成毒發疽
○蒜を食ひて口中臭きに、生薑と煮来きく
らへば ケさからず
○人参をかみて山芋を食べば息切れず
○古銅器は能く崇を避くるもの也、硯へ墨
べし。 以上三條 益軒の秘蔓抱より見る

○文房具

居家必用文房適用之部 評○硯○

端硯は端溪より出づ、上下巖有り、西坑餘慶
悉く其の下也、惟北巖を上と為す、北巖を上と
為すは巖の色理瑩潤なる者、銑ある者、尤も
墨を発す、本紫色を以て上と為す、紫石者、
大石の中より在て出す、蓋し精石也、又草蒙
草金線紋有り、惟眼有る者最良し、之
を鴝鵒眼と謂ふ、石文精美木の節有
るがごとし、今知らざる者は乃ち以て石の病

と為す、唯上巖の石眼有り、眼の佳き者青緑黄三色相重なる者多き者外より心より至るまで凡て九匝、甚大なる者尤も希有とする、或ハ硯中に布列して北斗心房星の形の如し、世人眼の多少を以て價の軽重とする、甚の墨池の外に生する者之を高眼と謂ふ、内に生する者之を低眼と謂ふ、高眼尤も尚ぶべし、然れども又活眼死眼有り黄黑相間り驚猜内に切り晶瑩愛すべし、

之を活眼と謂ふ、四傍浸漬して甚鮮明なるべ之を涙眼と謂ふ、死眼と謂ふ、死躰暑具り内外皆白く殊に光彩無きを死眼と謂ふ、大抵活眼ハ涙眼に勝り、涙眼ハ死眼に勝り、死眼ハ無眼に勝れり

龍尾硯　金星硯　羅文硯

蠟眉、　角浪、　杉文、

紅絲、　黒角、　黄玉、

紫金、並出東州唐彦敵作紅絲研自然為天下第一号

豆瓣硯並出歙州、硯之異名其石皆生于松尾溪金星無貴

池之端中島屋製

褐色硯　鶴金黒玉石硯

紫石硯出吉州　黄金硯出淄州

緑石硯出洮州　磁洞石硯出萬州

魯水硯出南劍州　苗石硯出綿州

石末硯出劍州　麻鐵硯出青州

大陀石硯出婺州　樂石硯出宿州

古瓦硯出相州　澄泥硯出流州

懸金崖石出萬州　軸基島石硯出登州

石末硯は受墨而弗筆、龍尾墨を得

ること難くして久く乾まず、羅文石は

墨を起すこと龍尾に過ぐ、端溪龍

窟巖の紫石之に次ぐ、古瓦は石末

に類す、他議するに足る無し

○洗硯　凡そ硯は日々之を洗ふべし、二三日

を過ぐれば即ち墨色差減ず、縱い未だ

滌ふと雖ども猶ほ赤須く水を易へべし

春夏蒸溽の時墨久く其間に留まれば

則ち膠力滯つて用ひがたく、尤も頻り

に之を滌去せんことを要す、硯を洗ふ

に乾陽を使ふことを勿れ、赤氈片故紙

を用ゆること勿れ、唯蓮房枯炭を以て之を使ふ最も佳し、端溪自ら洗硯石有り、或い皁角水を以て之を洗ふ可し不得。半夏切半して硯を洗ふも大いに滑墨を去る、又黄蠟硯を補して極めて佳し

○評筆

番禺の諸郡多く青羊毛を以て筆とす、或い鷄鴨毛を用ゆ、或い雉毛を以てす、五色愛すべし、又豐狐毛虎

池之端中島屋製

僕毛、鼠鬚羊毛麝毛猩毛羊鬚、胎髮等有り、興化にも皆兎毫を若かず、而して崇山絶仞の中の兎を取り、八九月之を收むべし、若し中秋月無ければ則ち兎毫まず、兎毫まざれば則ち毫少く幸貴し、夫筆須く鋒齊く勁健ならしむべし、今世筆皆鋒長し少しく損すれば已に兎すず、用の中らず矣。

宣州の狸蕃高、常州の許頓、鼠鬚散卓長ぶ筆を造る絶て佳し

筆者曰ク、熱湯ハ墨ノ膠ヲ卻ツテ凝固スベシ、宜ク微温湯ニ浸スベシ

○收筆

東坡黄蓮並湯を以て軽粉を調して筆頭を蘸し、乾くを候て收む。

○山谷は蜀椒黄蘗並湯を以て松煤を蘸して筆を染めて之を蔵むるを法とす。

○洗筆

器を以て熱湯を盛り、浸すこと一飯の久しき軽く搖い洗い次に冷水を用ゐて之を漱ぐ、若油膩有れば則ち皂角湯を以て洗ふ甚佳し

○藏墨法

熟艾を用て墨を和して收む、梅月に遇うて黴を石灰の中に藏するに甚さず

して佳し

○日本に硯材

土佐 海石と、石中銅錢のごときものを含む、也れ無きを佳とす

石王寺 丹波、銀紋うるみ易き欠坑ありて佳

雨端 甲州、奥山端山の二種あり、奥を佳とす

鳳凰 若狭、一名高田石とも、其色赤し 最好

五雜組に方于魯程君房ノ墨上々品ハ白金一斤ヲ以テ墨三斤ニ易フトアリ、方程二家共ニ明ノ墨工

池之端中島屋製

月輪　山城、古硯に佳なるものあり
高雄　〃　〃
高島　近江、堅実なるもの
月光石　吉野山、深黒色上材なるもの
櫻川　上野、江田
寒水　島宮水　美濃
黒山　信濃
金風石　三河
美濃石　美濃
内山石　摂津

高田　美作、古硯に佳なる上品あり
加茂川石　山城
高野川石　〃
鏡石　伊豆、信濃　笹瑞とも
二見石　〃
白石　肥後
白濱石　紀州
高濱　肥前、
木葉石　越後
高山石　備後

池之端中島屋製

赤間関　長門国赤間関中の浦ふし

饅頭石　岩城

正法寺石　陸奥

雄勝石　〃

延岡石　日向、紫石にて炭墨佳し

丹後墨石

流川石　早州、紫石にて多那の錦袋に似

深澤石　佐州

筑波石　常州　常陸紀行に三里大なる村小人慈と云地硯石を出す水を貯ヒ久しく涸レスト

武州墨石　江州彦根石に同し

池之端中島屋製

石卷石

金星石　上州

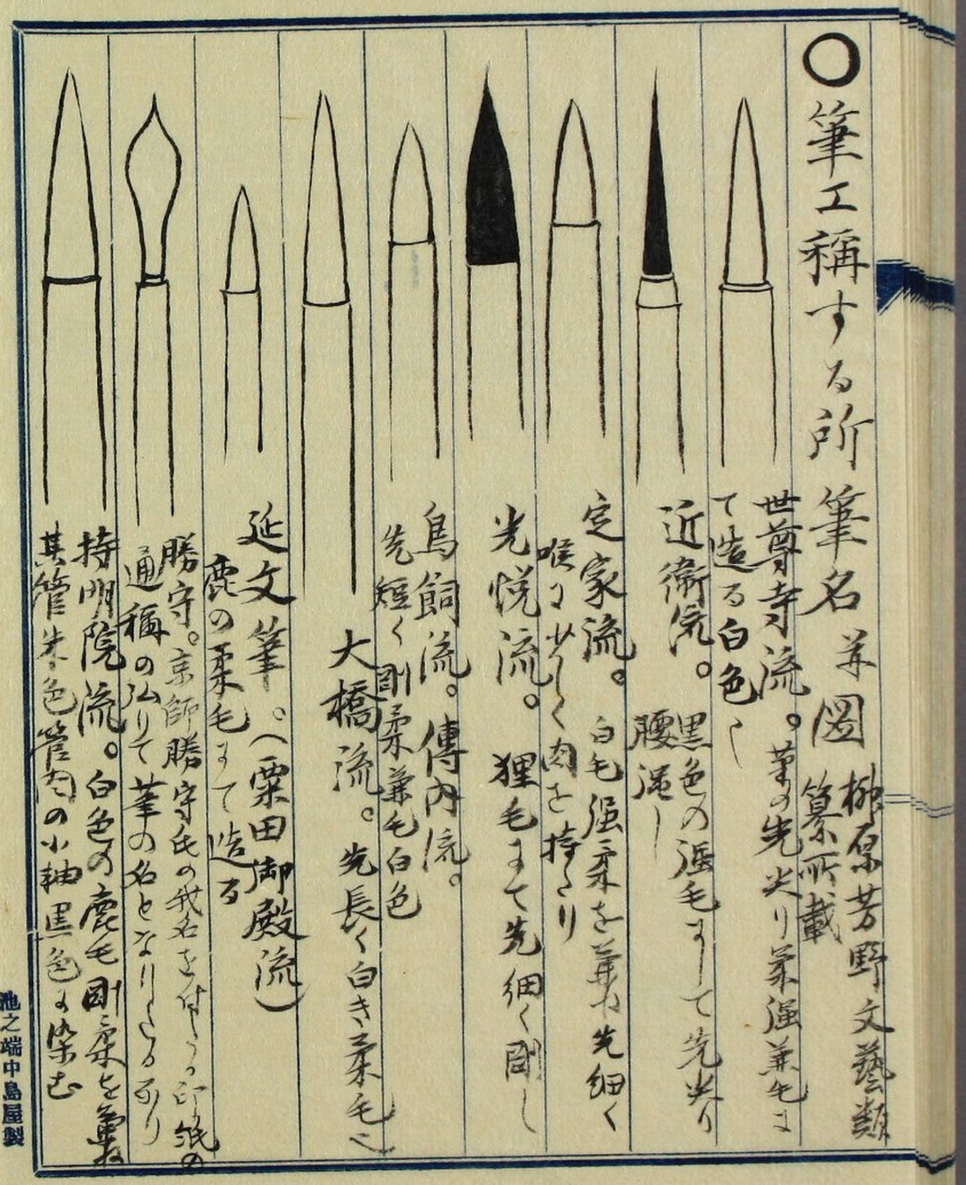
川越石　武州

以上文藝類聚所載

○碑。平面に刻したるもの

碣。曲面に刻したるもの

磨崖碑。天然の石壁に刻したるもの。古總稱して岩碑とす



○筆工稱する所筆名并図 柳原芳野文藝類纂所載

世尊寺流。筆の先尖り茅渟兼毛にて造る白色し

近衛流。黒色の渟毛すして先尖り腰渟し

定家流。白毛渟毛を兼ね先細く

唐の如くくねを持つ

光悦流。狸毛すして先細く剛し

鳥飼流。傳内流。

先短く剛毛兼毛白色

大橋流。先長く白き毛毛

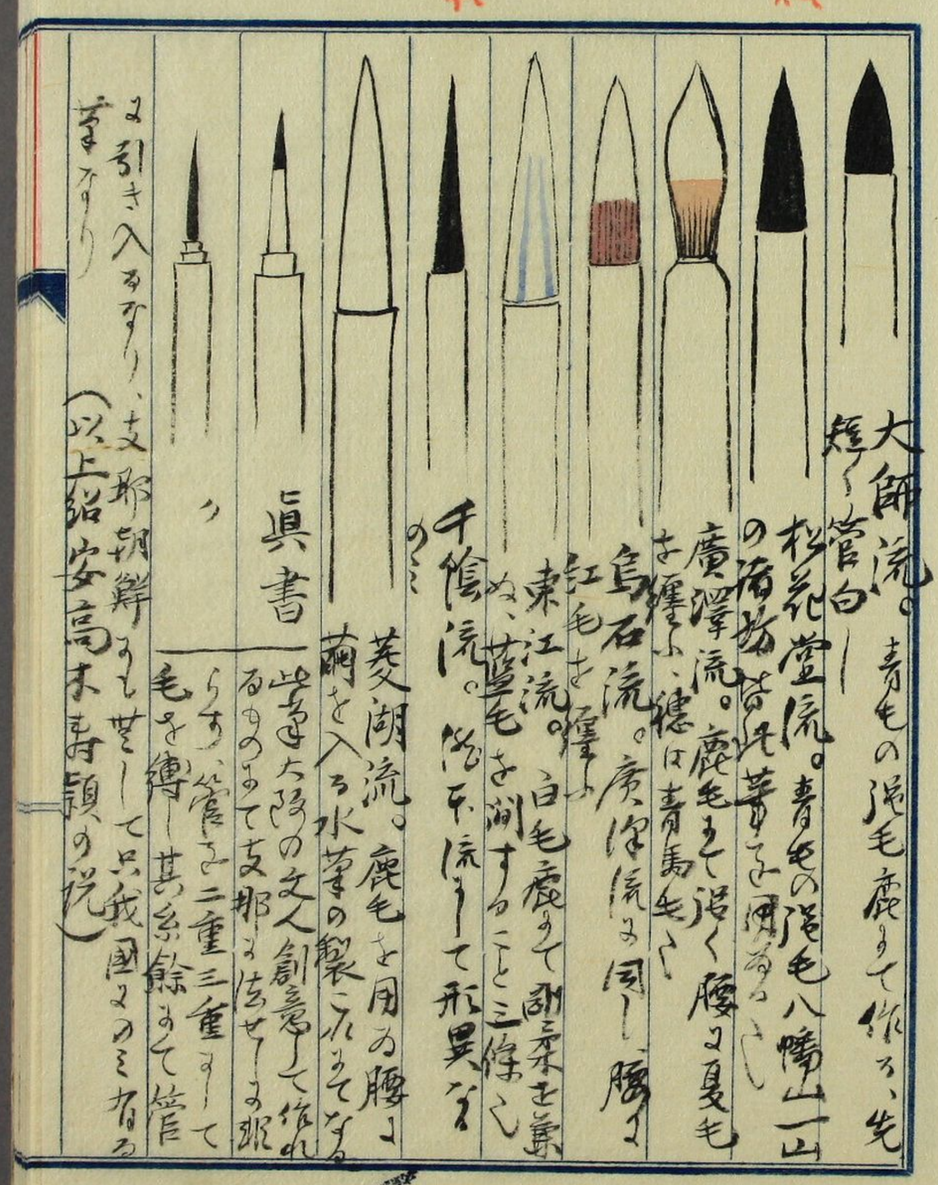
延文筆。（栗田御殿流）

鹿の毛毛すして造る

勝守。京師勝守氏の我名を付ける所紙の通稱の如りて筆の名となりしなり

持明院流。白色の鹿毛剛毛を兼ね其管朱色管内の小軸黒色を塗む

池之端中島屋製



光俊流なり

近衛流なり

大師流。青毛の渟毛鹿すして作る、先短く管白

松花堂流。青毛の渟毛八幡山一山の産物なり

廣澤流。鹿毛すして渟く腰す長毛を纏ふ、穂は青馬毛さ

烏石流。廣澤流と同し腰す江毛を纏ふ

東江流。白毛鹿すして剛毛を兼ね、豆毛を渟すること三條し

千隆流。渟毛流すして形異なり

菱湖流。鹿毛を用ひ腰す綿を入る水筆の製にして作れるものなり

世尊寺陸の文人創意して作れるものなり支那の法せしも那らず、管を二重三重すして毛を縛し其糸餘すして管を引き入るなり、支那の筆なり

眞書

（以上紹安高木壽頼の説）

ウドンノ粉、西瓜

ノビル、荊芥、菊花、桔梗、甘草、附子、烏頭、海老、緑青、琉球イモ、金柑、熊胆

朱葦ハ飲膳摘要

○食禁

紫蘇と鯉　毒瘡ヲ生ス

蜜と牛肉　同食スバカラス　蜜とネギト刺ス

胡葱（ヒルガキ）　四月ニ食ヘバ喘起ル

大蒜（ニンニク）ト蜜　人ヲ殺ス

芹（カラス）　兎肉、悪邪ノ病。鮒ト同ジ水腫

生薑　八九月食フベカラス

芥ト酪　薑ヲ損ス　高陸

越瓜（白瓜アサウリ）　鱉（スッポン）ト同ジカラス

甘露子（チョロギ）　諸魚　吐ス

池之端中島屋製

沙糖、ツウブキ
ギギ、荊芥
ヒエ、スッポン
羊、ソバ、蕎麦
菖蒲
スッポン、蒐、
猪、兎、鴨、
芥子
雀、李

カキ
柿と蟹
栗と杏仁　吐瀉ス
黒大豆　茅蔡子・厚朴ヲ忌ム
菉豆　わらびノ粉　腹張リテ死ス
醋　茯苓、茯神、辰砂
酒　辰砂、茶、辛キ物
杏仁　西仁ハ毒アリテ人ヲ殺ス
楊梅　生葱　炒豆、ソバ
胡桃　酒ト白ヲ吹ク

池之端中島屋製

銀杏　鰻
胡瓜　水ニ入レテ沈ムハ人ヲ殺ス
茶　土茯苓ト忌ム
鯉　天門冬、辰砂
鮒　蕎、砂糖、芹、雞、雉、鹿、麥門冬ヲ忌ム
鯰　猪、鹿ヲ忌ム、茱萸ヲ人、
鴨　胡桃、キクラゲ、納豆
鶏　蒜、芥子、李子ヲ忌ム　楽米
雉　胡桃、木ノ子、納豆、蕎麥
兎　薑、芥子、橘

ヒツジ

鹿、雉、鰕

牛　薤、ラッキヤウ

蕎麥、野豬（茄子）、タニシ、タヌキ、クルミ、ウナギ、餐、ヤモ、

菠薐菜、五倍子

胡椒、トウヂサ、スベリヒユ、

泥鰌、革蘿

チヨロギ、諸魚

カジカ、荊芥

大根、地黄・何首烏

ウナギ、ボケ、栗、梅、ハバ、モチ、破類

池之端中島屋製

○讀書寫文字　居家必用

凡讀書須整頓九案、令潔淨端正、將書冊整齊頓放、正身體、對書冊詳緩看字、子細分明讀之、須要讀得字字響亮不可錯一字、不可少一字、不可多一字、不可倒一字、不可牽強臆記、只是要多徧遍數自然上口久遠不忘、古人云、讀書千遍其義自見、謂得熟則不待解說、自曉其義也、余嘗謂讀書有三到、謂心到、眼到、

口到心不至此則眼不看子細心眼既不
專一卻只漫浪誦讀決不能記記不
能久也之到之中心到最急心既到
矣眼口豈不到乎
凡書冊須要愛護之損汚編摺瀆
陽江祿書積未竟雖有急束之待
掩東塾山齋然後起此最為可法
凡寫文字須高執墨鋌端正執筆
勿使墨汁汚手高執筆雙鈎端
楷書字不得令手揩着毫

池之端中島屋製

凡寫字未問寫得工拙如何且要一筆
一畫嚴正分明不可苟草
凡寫文字須要子細看本不可差誤
○紙墨吹ものなくしてはなりがたし（橫ヨコ不ノ葉を摘み）
てはべし奇効あり（書法比之下卷四十捷オ）
○墨と硯は善いほど人が自ら
さしてアラクなる（風流の本莊子卷一）
○宍戸蘭一が假名文、菱川が浮世繪。
「風俗の本」よりあり。宍戸蘭一或は荀舍
蘭一の誤りか

沈宗騫學畫編抄

○南方山水蘊藉而縈紆、人生其間得氣之正者、為温潤和雅、其偏者則輕佻浮薄

北方山水奇傑而雄厚、人生其間得氣之正者為剛健爽直、其偏者則粗厲強横

此自然之理也

○學畫之道、始於法度、使動合規矩以就模範中則補救使不流偏僻以歸大雅

終於温養使神恬氣靜心藝入古

池之端中島屋製

○至徇俗好以傾側為跌宕、以狂怪為奇崛、此直江門獨黑者之所為矣

○南宗之大家 王維、董北苑、巨然、二米、倪雲林、黃大癡、王蒙、董思翁。

○北宗之大家、郭熙、馬遠、劉松年、趙伯駒、李唐、戴文進、周東村

○南北不相者。荆浩、關仝、范寬、元季、吳仲圭、明、沈石田、文衡山

○清朝 龔者。王烟客、王鑑（奉州）。接其武者。石谷（王奉）林屋（王原祁）

池之端中島屋製

東村（周）

黃尊古（莫是）張墨岑（管球）論人畫皆紹恩翁而各開門徑恪守南宗衣鉢者也、北宗一派在明代專村實父後已罕有紹其傳者、吳偉（小仙）張路（平山）且屬孤禪、況其下乎何則西道論之邪派日起、一人倡之靡然從風、如陸曙（陸廣字日為）倡為雲間派、蓋璞倡為武林派、上官周、金陵派、又謂之金陵派、

○古人作畫專尚用筆、用筆之道務欲

去羅軟而尚挺拔除鈍滯而貴輕儁絶
浮滑而致沉著離俗史而親風雅爽
然而奇蒼然而古凝然而堅淹然而
潤點畫縱橫之際波瀾老成聲揺縱
送之間丰姿跌宕

○唐山紙ノ名

奏本紙 係奏本呈子等用一或有別樣用者
元書紙 書東紙表等用
畫心紙 係字畫或書籍等用
鐵色紙 同前

池之端中島屋製

羅紋紙 書東紙表等用
七部 色皮糊表等用
杉江箋 同前
連四 封筒色皮等用
薛濤箋 同前
參紅 色皮
仿宣箋 同前
重蓋大紅 東帖用係頂高
蠟箋 同前
西巨

壬二口

眞巨 ? 次些

巨紅 東帖用、係頂高、次些

木巨 同前 極底 ?

太史連 一名錦係賬 簿書籍等用

次厚綿料 係紙障燈 籠等用

川連 一名竹連

漿落 書籍 專用

毛落 同前 ?

毛邊 ? ?

白落 ? 糊表 等用

尖紅紙

尺八紙 書籍 專用

以上

○石斛の種類。唐赤頭に錄三四、文化年中、洛東の清井亭にて石斛草の舍あり、互に異品を出して勝を爭ふ、珍品十六種を得て閑殷して一時をうたふ、今存せず

金花山 中白そこ ふくらす

京洋教出

岩古今（は）青空、極

日光丸（白花）

人江霞輪（するはせる）

京（するとも京）

上山紅

彦城下

崎爪（一名中さし）

洛常行出

名古屋紅（一名紅緑）

池之端中島屋製

本紅爪

丹州

唐（一名流球、白花、日本の産ゾなからず、島国より渡来）

白斑黄斑（稜ニ山巒有）

黄霞輪（きるいのうちの上京）

黄爪

虎斑（一名はけこう）

四季咲

紀州

千筋

洛下反出

縮丸葉

靈山出

○王叡曰有書契以来、便應有筆、世傳蒙恬制兼也、崔豹曰、蒙恬以枯木為管以鹿毛為柱、羊毛為被、所謂毫、非今之竹兎也（續博物志）

○茶初作者。宇徳時代羽淵一塩瀬（以上南都のく）

宗清（紀路村代南都くく）慶首座（堺南宗寺の僧利休同門）

石川六左エ門（尾州

茶器名物　茶宿問話抄

乙御前・ふくろん尻張　利休時代ゝ茶

園城寺（利休ヤ代ゝ創り修繕し、ヤ〻〻〻の紀生、乗方ヤ代創り城寺の絵のひゞわを掃して作るゝ）

万代屋（織田有楽不好ノ香衝）

棚今宮（紀路村代江戸ゝ京ゝ南人の茶入、出来のゆゑ棚失さ物移来の古法ゝ棚ゝ為）

都帰り（ト改編ヤり）

中山の茶入・紀三井寺の茶碗（黒本の抱地とゝに廣り）

一壺の長津田幸尾（仮名小平次）が茶器

姥口　竹長より紫田隣あるの水くみ釜

平蜘　松永弾正ノ釜、自分の時砕けり

横紫の肩衝

乙御前の大壺　京ぞ

餌取釜の水さし・虚堂の墨跡

右四品作長崎ノ名知、不動国行大ア・二
家国宗ア・薬師ア・長ア・明石
助・切手助・一旦・おかりさく・切手・茶の湯の時、
日伝と言ふ・駿河ものあり

顔回　瓢の花生、まと形れのおちし水筒、
瓢の花生、瓢ものと種ものの

茄子の葉入種し

池之端中島屋製

宗旦茄子

小野なすび

醍醐茄子

豊後なすび

みをつくし茄子

沼路なすび

京極なすび　七月十日霜あり

長崎なすび

千鳥　吉野の利休不持、妻宗恩と計り是一
ばかりの品を撰せり
はるさめ　こやもより
なるもの　吹徳院御製

内海 茶碗。初代名和の茶碗の肩衝なれども、海の用ゐ一つづつ添置さしとなり。又焼あとやきのがるもあり。用ひられ茶を入るの世よ

雪風 ユキカゼ とよむ

湯桶の茶入 島もの、赤井某のこしらへ

法界門 法界門と云ふ塗師、京都の茶碗の前法堂の海、後頃所の大門ある扣えて山門なり

羽田 大徳寺前にあり、又唐和の

内赤 瓶川東唐と共に絵あり

○天目大略。灰かづき・曜変・由滝・黄天目・只天目・白天目・瑞皮茶碗・

建盞・黄天目ノ白天目・白天目ノ黄天目

○天目盞。七ツ盞・花瓶盞・鍋坊の盞

志野 茶碗盞の茶碗

鉄茶碗 青磁、茶碗盞、大すりこぎ

七ツ茶置。三ツ茶・煙・さじ・

鍋屋ノ香炉・三人坊主・五徳・輪

達磨 宗旦作 [illegible]

○楽焼補
丈山 京舟寺
丈山 〃 京
古萬堂

鉢ひらき 細川侯
あやめ
あこうも
再来
湖月
一文字
桃源坊
寺印坊
ぬれ烏

筒井 京北野の井戸茶碗。茶碗の縁の所
筒井つ井つ井戸茶碗。此の部
ながれながれ井戸茶碗とが
阿弥陀堂 釜 ちがひ。より名あり
鉢ひらき 茶碗 此のこゝろ利休より三斎の時
雪山 宿衛。堺の名利休
芋頭の水 南蛮のやきもの、京極美
○楽焼名物 元祖 朝次郎
東陽坊 黒 不好者の名にて猫耳、後藤池
齋 黒 織田 戸 徳川不好
ちまき 黒

西王丸名不好

検校 京、初代検校を茶人
此の名の起りは茶碗を
掘り出し中に所名
利休が見て此の
各は検校
金輪寺 京東。茶碗小春山、芦野吉水院
田子浦 京行。利休 三斎 三宅七羊
菊水の釜 屋 蒔書軒
大備堂 釜 蒔 斎山より出づ、丁西の火
玉堂 茶
相国寺 宿衛、唐物、古田織部
蓮華王 茶壺

園屋肩衝　大文字屋ニ入る

日野肩衝　[illegible]

鶴の一声　[illegible]

雲山　[illegible]

白雲の春霞　[illegible]

初花の小壺　[illegible]

幅
硯
水石
法帖
讀本
書画帖
焼物
机
墨

土井聲牙筆　竹石　紙本　一幅

中岩舊坑端溪硯　一面

紀州古屋谷水石　桑箱附　一

張旭楷書尚書省郎官石記序

写本春雨色のかくり　一冊

書画帖　瑕瑜互見　一帖

朝日焼魚籃觀音　一面

古桐材机

墨　程君房　二枚

池之端中島屋製

硯〃〃〃
盃石

稀本如意君傳 写本
丹溪紫綠留硯研
利州牡丹葉彫硯
三重漆砂硯
兩端懷中旅研
紀州成溪水石
磬石
石田老人愛玩硯
堆朱印籠
金剛兵衛盛高脇差(一尺五寸)

池之端中島屋製

古相馬燒龜斑茶碗
仙臺藩庭燒湯呑
益子燒濱田庄司作茶碗
常滑長三作急須
蒙古古鐙

如意君傳圖錄

媚孃侍高宗洗手

〇〃深院文會

高宗幸尼寺

媚孃尼延髮入宮

伴童子馬上高官

薛敖倉肉具露出示朋友

武后聽師典　文會　侍女三人

〃會見于懷義和尚

〃文會　侍女三人

池之端中島屋製

武伯張昌宗〻易之庭園敎策

〻張氏文會

牛晉卿薦節敎倉

○敎倉洗浴

○武伯試敎倉肉具　戸一　陰

〻〻文會　戸二　侍女燒蝋燭

○〻　戸二

〻　戸三　庭園花蕚

〻賞晉卿

〻敎倉文會　戸四

〻　戸五　小女二

〻〻　無絶　侍女四人

〻〻　立文會　戸六

〻〻　飼金鳥　戸七

〻〻　不後赫入禁闥　戸八

〻〻　庭園蕚扇　侍士二人　侍女三人　奏樂

〻〻　茶迎　侍女二人　戸九

〻〻　賞肉具　戸十

〻〻　廻　庭園　戸十一

〻〻　切肉具

池之端中島屋製

燒陰　侍女

〃　李白　裏面廊

詩伯雖如意君　侍士九人

○溫柏香奔就　乾倉

武后取張昌手

〃　召如意君手簡

如意君讀詔書

〃　去承嗣邸

不明　扶甄之老人

洞房春意

〃

○如意君仙姿　〃上

池之端中島屋製

古今事文類聚總目

○前集

天道　天時　地理　帝系

人道　師友　主賓　仕進　及第　隱逸　狀元

仙佛　民業　技藝　樂生

嬰疾　神鬼　喪事

○後集

人倫　妻　淫婦　美女　娼妓　奴僕

肖貌　穀菜　林木　竹筍

葉實　花卉　鱗蟲　介蟲

毛蟲　羽類　獸　獸豕

○續集

居處　香茶　燕飲　食物

燈火　朝服　冠屨　衣衾

樂器　歌舞　墨印　珍宝

器用

○別集

儒學　文章　書法

文房四友　禮樂　性行

仕進　人事

池之端中島屋製

○外集

東宮官　睦親府　王府官

節使　統軍司　諸司使

諸提舉　路官　縣官

○新集

三師　三公　省官　省屬

六曹　樞密院　御史臺

諸院　國史院　諸寺

諸監　殿司　諸庫局

○遺集

三師　枢密院　荷官
諸院　東宮官　國史院
六曹　寺監　荷屬
封爵　王府官　節使
殿司　統軍司　府司
監司　諸提舉　路官
宮觀

池之端中島屋製

硯の石柔かく墨堅からざれば善を弱くなり
てよし、硯よるべし
硯堅く墨弱ければ力を入れて強く和べし
古墨の新しつきこのみつる時は油を加へて
和らぐし
色紙短冊の上に墨つうずは、もち米の
粉をふりてするべし
墨一筋を常に和ばすりは濃うひ朽
ちて墨の性あしくなる、他のを取り替

こすりてすべし

成人墨の筋の内、初めのうすく中強く
悪しく、墨を乾かざる者初めもうすく
しくして中は無相うすくこれと入り
無るはあらず、同じ墨を久しくも
乾きそすり口常に湿り有る故墨
の性あしくなるべし

硯の新しきはまず墨をよくおろす、二
三度を経て、墨をするべし、ゆがび
やすし硯の面滑らかにして墨をおろすべ

池之端中島屋製

墨をするべう一時に多くとる墨濃
すぎる、然らば硯を傾け硯の
面をよく磨ぶべし

○善き唐墨は前の日より無ねてすり
はじめおようるべきなり、
又悪き墨は俄にすりこなすべ
きなり

○筆のこと、ふくさ紙には唐の毛、打
紙には羊の毛、強き紙には狸の毛、よし
と唐高記する処なり

硯の墨糟を落くるは野苑の乾したるを墨のごとくして用ゐる事朱硯と用ゐる法のごとくすべし、草稿は大にしてきあのこまかなるを用ゐべし

筋ありてきあらるるはあり、墨を収むるはすべて女子つくみおくべし、又桐面のごとくにして石灰のナリ蔵あるべしとぶすべし

筆を入れ置くは水を塩をつれ、其水を浸してもはべ出だいず、墨を

つけておくもよし

筆匠の云、兎毛といふは唐を兎とりるるし、夏毛としふは毒を夏とりるるなり、兎は毛唐ふうして大きに堪ふ、夏は毛老てこはきゆえ出るるなり、夏毛は稲田より来るをよしとす、狸毛は肥前より来る、本毛黒し、唐の夏毛よりはこく、狐毛はこ一つよし、狸

は猶よく〳〵まつゝし、狐もこうんをい
と云、毛やうのもの、ふんきよりもたち
毛はなぜ、狐い狐よりやい
らくゝ兎い貂より墨ぐいやうらし
兎い紙あ〳〵きは用すし、よく〳〵おさ
ゝ紙よりも毛よりい人きに陸
ふ、狐は四国より来るをりうんし
兎の毛は方より高ゝ中ゝ狐後の
白毛をのとゝん、赤毛のもい夏毛の
上なり

池之端中島屋製

○墨の好悪を識るのいすりゝ墨を
陸の上にめるとき陸と光をあるそふを
上ふるすに光陸の上に墨をつけてそ
上中下をしるべし

○新墨のうちゆやうゝして快よう
ず次第につよくなりて力よきなり
一年のうちこゝて快きは後みじか
し

○文字をすきうつし出るは白き
厚紙を本の下にあてうつせば分
明まんゆるし　敷き写しトテ人ヲリ、貝原先
生ノおれバ遠き位しなり徒フベシ

事林廣記ニ云筆を洗ふ熱湯につけて了飯の糊おしまして洒さっと冷水をそそすすぐべし油氣有は皂角の莢ごとを洗ふト。

天童ゆもつ微温湯（所謂人肌湯）をそそふく如くは可し、熱湯は悪し

を凝固せしむる、終始微温湯よし

凝墨よく解くるなり

綿ものの書くるは薑汁をつけて墨をすべし

紙をしく或てふすりの墨つのずば硯の米炊のくるを用をかれすべし

墨紙をかをくるは墨の中詩所を

ふすべし

以上鄙事記抄也

硯を毛氈或は紙をしく

毛紙墨を深すれば毛氈紙を敷すれば

毛氈紙を南京の宿紙をしくと

ふすべ度ものしくと硯を法に拭べし

長く使ものしくと肌潤か

池之端中島屋製

○

○

○

して唐の色を主とし高く堅くして沈黄
赤うして鶏卵の色のごとくなるを上
とす似て異なるものあり
色甚だしくして堅くして
脆く折れやすく硯の水を落すに
悪い墨色光彩なし
冬月の硯の水の周囲を砕き綿
をつつみ暖めゆえに厳寒
にも凍らん又丁子の油を
硯に塗るなり石を固くし
胭脂

○

○

○

て潤ひあり真の水乾こずして青
石にその次なり
墨の美恶を試るには大字を
写すべしよく行のごとし細字
にては知りがたし
唐紙は唐墨を用ひ悪
貴賤あるべし濃なる墨いかにあり
地をそこなう紙は墨色薄くみゆ
石のごとくに書くべし
和墨の形

戴い胭脂青金

池之端中島屋製

書墨は墨を回り墨汁則傷ず
彩太墨則滞鋒鋩
養硯法　硯の池に乾すべからん毎
日水をかえて墨を
和すべからず水をとくべからん
用うる時新たに水を浸す
硯を墨を洗べし　洞天硯録
墨をすりては石の面をしるべしなて
ゆるやかにすべし　あまりたる
くすりを墨に入れべ

池之端中島屋製

又硯をわるやうも墨汁
ずべからず
以上四章　東京　服部誠

○城中水乏しく、敵寄せさるるやう、白米を以て馬を洗ふと擬したりとは蒲生氏郷の祖父下野守貞秀入道知閑なり。それは細川政元の臣治部大輔高基と軍し、近江の青羽の城に拠りての事なり

○紫田勝家所水の甕を割りしとは佐々木承禎と合戦の時なり

○岡野左内は蒲生氏郷の臣なれども合戦し又上杉景勝の臣となりても合戦せり

池之端中島屋製

免れ難き会津の武士と

○慶長庚子上杉景勝会津に兵を挙ぐ

多し、其の部下にして井筒女之助棚倉

を守るとあり、常山紀談に尼子十勇

士の一人にて井筒女之助なる者あり、

尼子亡びて女之助上杉家に仕へしか

考へべし

○井筒女之助、新発田治長の深月毛を

得て乗馬とせり子孫今見ゆ

○佐々成政之改められ甚敷きに耐ず

池之端中島屋製

家方の士赤羽城を奪、村永福が妻の

二男紹、氏生保が母と同族なりとも

べし

○坂山坂、氏郷の士蒲生原左衛門の前名

○氏郷の士鄭矢甚右衛門の高言「敵の大

刀先左の脇よりあらはれ射ぬ

きば中らぬ矢はなきものなり」と

○三美男。大崎村の士鄭矢庄左衛門、

妻沢の不破方作、氏郷の名歌山三郎

○曽呂利新左衛門ノ本名。杉本弄右衛門、

後ゝ坂内宗拾とゝふ　甲子夜話巻二十二　三百十四ウ

○甲子夜話二十七巻　三九七丁　に再生の話あり

○夫婦並に才學ある者。　目原益軒・二山

伯養・梁川星巖

○唐詩英華　七言律而已を出だし中

に李・杜僅に六首、杜甫は百三首を

選載せり、其の李白の六首、

題龍丘崔明府丹竈

登金陵鳳凰臺

送賀監歸明應制　細師国人尾張笑　三此詩一首ノミ

賸餘雜錄

別中都之明府

題東溪公廨

○律詩。深陳以下声律對偶之詩也

一二名起聯、又名發句。三四名頷聯。

五六名頸聯。七八名尾聯。又名落句。

○行李。左傳、一介行李、杜預曰、行李

使人通聘問者、按古文使字、从山从人从

子、豈悞以使字為李耶

○斧正。　賸餘雜錄巻四、二十八丁ウ出来詳

○東坡が赤壁之賦、賦體なるべし、記なり
人見寧が黒甜瑣語初編赤壁三遊の條
も辯ぜり

○異名　方言、前ゝ云て黒甜瑣語に箒
紫打と題して、初秋の比より樹木の枝を
伐て先を尖らし地上より突き立て打合し
て勝負を学ぶ是を雑けて　提木（キツキ）と
云ふ又所によりて　かな木打　と云ひ
いわ打とも云ふ、孤撃打とも云ふ
云々、字彙に杖の大詩典を見るべし、

池之端中島屋製

根木と題し、其の異名、めつき・ねつ
きんぼう・ねつくい・にき・ねんがら・
にがら・げたら・ちゝ・ねんが・ねんうち
のねつき共十名を挙げて黒瑣の名
のうち三名無し、されよりて見るに
如何ゝ博覧多識を誇るも九牛の一
毛を識るに難し、偖ゝ右十四名の外
又他すべきあるべし。十四名のうち雑者を
得べき名稱は　ばいあ打　ねつくい
二名のみ。ねつくいのくいは杭なるべし

拾遺愚
かの国にて萩が
ゑだのこ縄を
ゆひまわしてやね
りそのくだりケ
ちそはかるふ
ハシバシこの如き
柔木を編め
代りにせんとすとて

○内大臣實條初就幽齋學和歌、一日書能津加佐・耶津迦佐・仁之幾登利等故語、求問其說、幽齋備辯之而謂曰、卿如有學此之問、須學和歌也、此等疑難古今先達既論之心思甚違道也、論而遣、蓋合往付宣家官為侍從之日問其父曰、禰留耶禰里耶之為言何也、俊成白眼曰、欲聞其說者詠之矣乎之意也

（野史雲名抄）

○吉野十八郷

池之端中島屋製

山、龍門、川上、黒滝、國栖、池田御料、阿智賀、宮上、賀名生、丹生、橡川、古田、宗川、天の川、十津川、北山、年の川

○東北の遺臣、岩見、中村、真弓、衣笠等、南朝新帝を宮に奉り神璽を奪ひて北朝方に長線三年六月廿七日に至て、明和三十四年六月廿七日に五百年に当る、岩見の此の悪事を許せるは三條實美の祖三條右大臣實量なり

○陶詩時運、我愛其靜ヲ評シテ湯東澗曰ク、靜之為言謂其世外慕也ト

○蔡寛夫曰、素業已前、富書未備、既多假借、而言世反如、平原諸通用、自晉梁後、既拘以四聲、又限以音韻、故士常以偶儷爲病、而工文氣安得不弊、惟陶淵明、雖間用韓退之時ヲ擺脫拘忌、故極字奥妙、自晉以一取其侯韻用、蓋其力有足

池之端中島屋製

以勝之（陶詩三、九丁侍）

○荒溪三笑。石恪作圖、東坡賛之、李伯時蓮社圖、書元宗紀之

○助語、柳子厚が杜温夫に與へし書を見て、日本人は到底悟り難きを知るべし

○箭を折らしめて子に教ふ。

毛利元就と阿閦

吐谷渾威王阿豨子二十人有り、死に臨みて諸子に命じ各一箭を獻じ、一箭を其の墓前に利延に授けて之を

舟と雲と墨と永

折らしむ、慕利之を折る、又十九蓋を取りて之を折らしむ、慕利近折る所はず、阿蘭乃ち之を論して曰く海書之を知るべし、孤は則ち折り易く衆は則ち難し、海軍益に力を勗し心を一に共にし以て國を保ち家を寧しんずべしと、言終りて辛す。元色利之の子の節に論ずるに同じ

○景紀安永義熙十二年の條に曰く、

太尉裕彭城より還り太原王旦を以て征軍史とす、初め王欽の敗るるや、沙門曇永其の幼子華を匿し、衣襆を指けて自ら隨はしむ、津邏之を疑ふ、曇永華を呵りて曰く、奴子何ぞ速かに行かざると、之を捶つこと數十、曇永遂に申りて免るを得たり。

右二條佛教公認の義務を如ちしとする條說なり 通鑑百十七 義熙十二年

右二條佛教公認の義務を如何なりしか 通鑑百十七 義熙十二年

不應、不道也

○王道與霸道（簡辭）

司馬溫公曰、王霸無異道、昔三代之隆、礼樂征伐自天子出、則謂之王、天子微弱、不能治諸侯、諸侯有德、享其典國、而討不庭、以尊王室者、則謂之霸（通鑑考异、九丁ウ）

○列子楊朱篇曰、晏平仲問養生於管夷吾、管夷吾曰、肆之而已、勿壅句讀

池之端中島屋製

亀之端中島屋製

以下全て
白紙

之端中島屋製